

# Historical Development of Salvation Theories Fond in Commentaries on the Bhagavadgita

|       |   |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2020-03-05<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: Shima, Iwao<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.24517/00057055">https://doi.org/10.24517/00057055</a>                       |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



17/  
183

|       |
|-------|
| KAKEN |
| 1992  |
| 27    |
| 金沢大学  |

# 『バガヴァッド・ギーター註解』に見られる 救済理論の展開に関する文献学的研究

(課題番号 02610011)

平成4年度科学研究費補助金(一般研究C)  
研究成果報告書

平成5年3月

研究代表者 島 岩  
(金沢大学文学部行動科学科)

|    |
|----|
| IN |
| 2  |
| 学  |

KAKEN  
1992  
27

## はしがき

### 〔研究の目的〕

本研究の目的は以下の通りである。

グプタ朝後期以降の中世インドは、ヒンドウイズムにおいて救済理論上の大きな転換の起こった時期であるが、この時期における救済理論上の転換の意義を、以下のような変化に焦点をあてて、思想史的観点から検討する。1. インド中世の初期には、ミーマーンサーの説く儀礼からシャンカラの説く瞑想の帰結としての神秘的直観智への転換とという変化が認められるが、それはどのような思想史的变化としてとらえるのか。2. その後、中世ヒンドウイズムのなかでのバクティ（帰依）運動の高まりとともに、シャンカラからラーマヌジャ以降への変化に代表されるように、瞑想からの帰依へという救済手段の転換が認められるが、それはどのような思想史的变化としてとらえるのか。3. さらに、ラーマヌジャ以降のヒンドウイズムのなかにもサンスクリット語による宗教の伝播から地方語による宗教の伝播という転換、および、ラーマヌジャ、マドヴァ等の瞑想的性格の強い帰依からヴァッラバ等の情緒的性格の強い帰依という変化が認められるが、それはどのような思想史的变化としてとらえるのか。以上の諸点を、ヒンドウ教の根本聖典『バガヴァッド・ギーター』解釈史を縦軸としながら明らかにすることによって、中世インドにおけるヒンドウイズムの救済理論の歴史的転換の思想史的なモデルを構築する。4. またそのための基礎作業として、『バガヴァッド・ギーター』に対するシャンカラ、ラーマヌジャ、ヴァッラバ、マドゥスーダナ・サラスヴァティーの註釈を和訳し、同時にそのテキストをコンピュータに入力し他の研究者の利用に提供する。

以上のような目的のもとに、以下のような経過で研究を実施し、その成果を次のような形で発表した。

### 〔研究の経過と成果〕

#### <平成2年度>

ヒンドウイズムにおける救済理論の儀礼から瞑想への転換に焦点をあてて、『バガヴァッド・ギーター』にたいするシャンカラの註解を中心に、儀礼から瞑想への転換の救済論上の意義を明らかにすることに着手した。そしてその成果をまず口頭発表し（「シャンカラのギーター解釈」第41回日本印度学仏教学会、平成2年6月23日）、さらに同学会誌に掲載した（"Śaṅkara's Interpretation of the Bhagavadgītā"、『印度学仏教学研究』39巻1号、1990年12月）。また同年8月末には、ウィーンで開催されたサンスクリット学会において口頭発表した（"Historical Change of Salvation Theories Found in Five Commentaries on the Bhagavadgītā" VIIIth World Sanskrit Conference, 1990.8.26）。一方基礎作業としては、『バガヴァッド・ギーター』（第二章）に対するシャンカラ、ラーマヌジャ、ヴァッラバ、マドゥスーダナ・サラスヴァティーの註釈の和訳と、テキスト入力を開始した。そしてその成果は以下の通りである。

1. 島 岩・引田弘道「『バガヴァッド・ギーター註解』和訳（第二章の一）」

『愛知学院大学文学部紀要』第19号、愛知学院大学、1990年3月。

2. 島 岩・引田弘道「『バガヴァッド・ギター註釈』和訳（第二章の二）」  
『愛知学院大学人間文化研究所紀要人間文化』第5号、愛知学院大学人間文化研究所、  
1990年9月。

3. 島 岩・引田弘道「『バガヴァッド・ギター註釈』和訳（第二章の三）」  
『愛知学院大学文学部紀要』第20号、愛知学院大学、1991年3月。

<平成3年度>

ヒンドウイズムにおける救済理論の瞑想から帰依への転換に焦点をあてて、『バガヴァッド・ギター』にたいするシャンカラとラーマヌジャの註解を中心に、瞑想から帰依への転換の救済論上の意義を明らかにしようとした。そしてその成果をまず口頭発表し（「ギター註解に見られる救済理論の展開ーシャンカラからラーマヌジャへー」第4回日本南アジア学会、平成3年10月13日）。また一方では、前年度に行ったシャンカラのギター解釈に関する研究をさらに押し進めて完成させた（「シャンカラのギター解釈」『仏教文化史論集II』成田山仏教研究所紀要15、成田山新勝寺、1992年3月）。そしてその結果、次のようなことを明らかにした。

「シャンカラが、行為の道（儀礼）と知識の道（瞑想による神秘的直観智）という枠組みで、ギターを一貫して解釈していこうとした背景には、次のような事実があったと思われる。すなわち、仏教神学を凌駕するような形で現れたヒンドウー教神学確立の動きの中で、まず最初に現れたヴェーダ祭式主義の復興にたいして、その批判を通してウパニシャッド主知主義の復興を図ったシャンカラにとっては、ヴェーダ祭式主義（行為の道）にたいするウパニシャッド主知主義（知識の道）の優位を確立することが最大の課題であり、そのため行為の道と知識の道という枠組みの中でギター解釈を行い、最終的にはギターをブラフマンとアートマンとの同一性の知識による解脱を説くものとして、ウパニシャッド主知主義の伝統の中で理解していこうとした。そしてその同じことが、彼のバクティの解釈の中にも現れており、バクティを知識あるいは知識が輝くのを助けるものという形で、ウパニシャッド主知主義の伝統の側からのみ理解していこうとしているのである」。

一方、基礎作業に相当する、『バガヴァッド・ギター』に対するシャンカラ、ラーマヌジャ、マドヴァ、ヴァッラバ、マドウスーダナ・サラスヴァティーの註釈の和訳に関しては、当年度初めに愛知学院大学から金沢大学に移ったため、成果を共訳者（引田弘道、愛知学院文学部助教授）と共同で発表する場を失い、刊行された成果という形では成果を発表することができなかった。原典翻訳の場合には、一論文の量が多くなるため、通常の学術雑誌にはなかなか掲載できないという事情があり、紀要等に発表せざるをえないことになるので、将来的には、共同研究による翻訳・論文が、所属機関を越えた形で紀要等に掲載できるようになることを望む次第である。

<平成4年度>

ヒンドウイズムにおける救済理論の瞑想から帰依への転換の意義を、『バガヴァッド・ギター』にたいするシャンカラとラーマヌジャの註解を中心に、「シャンカラの瞑想主義からラーマヌジャの帰依への転換」という形で最終的に明らかにし、その成果を "Historical Development of Salvation Theories Found in Commentaries on the Bhagavadgītā: From Śaṅkara to Rāmānuja" 『南アジア研究』4号、19

92年10月に発表した。そしてその結果次のようなことを明らかにした。

「『ギター』の説く救済への道は、通常、行為の道、知識の道、バクティの道という形で定式化されるが、その相互の関係についてはもちろん、個々の内容についても後世の註解書の解釈は実に多様である。すなわち、これら三つの救済への道に関する解釈の歴史をたどることがそのままヒンドゥー教の救済理論の展開をたどることにはかならないと言っても過言ではないほどなのである。そこで本研究ではまず、シャンカラとラーマヌジャの解釈を取り上げ、彼らのギター解釈の基本的なスキームの中でこれら三つの道と瞑想がどのように位置づけられているかを比較検討した。その結果、シャンカラがギターを、祭式の執行（行為の道）とアートマンの直証（知識の道）という二元論的な枠組みの中で、アートマンの直証による解脱を説くものとして、ウパニシャッド主知主義の伝統の中で解釈していこうとするのに対して、ラーマヌジャは、祭式を始めとする宗教的行為の実践（行為の道）から、アートマンの直証（知識の道）を経て、バクティによる救済へと至る階梯を説くものとして、ギターを解釈しようとしていたことが明かとなった。さらに、バクティの解釈に関しては、シャンカラがそれを知識あるいは知識の手段と理解することで、バクティをあくまでウパニシャッド主知主義の伝統の枠内で解釈しようとしたのに対して、ラーマヌジャはバクティを、一方では行為や知識や瞑想と関連づけることでヴェーダ以来のブラフマズムの伝統の中に位置づけながらも、他方では神への愛というその熱情的性格を保持することで、両者の調和を図ったのであった。そしてこのような救済理論の瞑想から帰依への転換の背後には、世界の实在性に対する否定的態度から肯定的態度への転換、それにとまなう人間の世俗的・社会的行為に対する否定的態度から肯定的態度への転換という、大きくとらえればインドにおける古代的思惟から中世的思惟への転換があるものと思われる」。

一方、「『バガヴァッド・ギター註釈』和訳」に関しては、前年度に引き続き、共訳者と共同で発表する場をえられないという事情に変化は見られなかった。そのため、私の担当分のうちシャンカラの註解部分の和訳だけでも進めておこうと考え、以下のような形で発表した。

1. 島 岩「『バガヴァッド・ギター・シャンカラ註解』和訳（第二章の四）」

『宮坂宥勝博士古希記念仏教学印度思想論集』法蔵館、1993年3月刊行予定。

2. 「『バガヴァッド・ギター・シャンカラ註解』和訳（第二章の五）」『渡辺文麿博士記念論文集』永田文昌堂、1993年3月刊行予定。

なお、[研究目的]に述べたもののうち、当面の目的である「救済手段が儀礼から瞑想を経て帰依へという形で転換した」という事実の持つ救済論上の意義に関しては、「シャンカラの瞑想主義からラーマヌジャの帰依への転換」（「シャンカラのギター解釈」『仏教文化史特集II』成田山仏教研究所紀要15、成田山新勝寺、1992年3月：“Historical Development of Salvation Theories Found in Commentaries on the Bhagavadgītā: From Śaṅkara to Rāmānuja”『南アジア研究』4号、1992年10月）という形ですでに発表したの、それをもつて研究成果報告書に代え、さらに資料として「『バガヴァッド・ギター・シャンカラ註解』和訳（第二章：26-72）」を添付することとした。

[研究組織]

研究代表者： 島 岩（金沢大学文学部行動科学科比較文化学講座）

[研究経費]

|        |         |
|--------|---------|
| 平成23年度 | 900千円   |
| 平成24年度 | 600千円   |
| 計      | 1,900千円 |

[研究発表]

(1) 学会誌等

1. 島 岩・引田弘道「『バガヴァッド・ギーター註解』和訳（第二章の一）」『愛知学院大学文学部紀要』第19号、愛知学院大学、1990年3月。
2. 島 岩・引田弘道「『バガヴァッド・ギーター註釈』和訳（第二章の二）」『愛知学院大学人間文化研究所紀要人間文化』第5号、愛知学院大学人間文化研究所、1990年9月。
3. 島 岩 "Sāṅkara's Interpretation of the Bhagavadgītā"、『印度学仏教学研究』39巻1号、1990年12月。
4. 島 岩・引田弘道「『バガヴァッド・ギーター註釈』和訳（第二章の三）」『愛知学院大学文学部紀要』第20号、愛知学院大学、1991年3月。
5. 島 岩「シャンカラのギーター解釈」『仏教文化史論集II』成田山仏教研究所紀要15、成田山新勝寺、1992年3月
6. SHIMA Iwao, "Historical Development of Salvation Theories Found in Commentaries on the Bhagavadgītā: From Sāṅkara to Rāmānuja"『南アジア研究』4号、1992年10月。
7. 島 岩「『バガヴァッド・ギーター・シャンカラ註解』和訳（第二章の四）」『宮坂宥勝博士古希記念仏教学印度思想論集』法蔵館、1993年3月刊行予定。
8. 島 岩「『バガヴァッド・ギーター・シャンカラ註解』和訳（第二章の五）」『渡辺文麿博士記念論文集』永田文昌堂、1993年3月刊行予定。

(2) 口頭発表

1. 島 岩「シャンカラのギーター解釈」第41回日本印度学仏教学会、1990年6月23日。
2. SHIMA Iwao, "Historical Change of Salvation Theories Found in Five Commentaries on the Bhagavadgītā" VIIIth World Sanskrit Conference, 1990.8.26.
3. 島 岩「ギーター註解に見られる救済理論の展開——シャンカラからラーマ—ヌジャヘー」第4回日本南アジア学会、1991年10月13日。